

修士論文

ディベートを中心とした演習型授業における図書館と学部教員による授業実践の試み

A Class Practice under the Cooperation of a University Library and a Faculty in Debate

Exercise-Based Classes

熊本大学大学院

社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程

132-G8815 八尋 芙美子

指導：喜多 敏博 教授

合田 美子 准教授

都竹 茂樹 教授

2016年1月

## 目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究の背景	1
1.2	研究目的	2
1.3	先行研究	2
1.4	本論文の構成	3
第2章	事前分析	5
2.1	前提条件	5
2.2	授業計画と実践内容	6
2.3	対象者（学生）分析	9
2.4	技術分析	10
2.5	環境分析	10
2.6	情報検索部分の課題分析	10
2.7	2014年度の実施状況分析と課題	10
2.8	事前分析の考察	13
第3章	対面講習および教材等の設計	15
3.1	対面講習の設計	15
3.2	教材等の設計	17
第4章	対面講習および教材等の開発	18
4.1	対面講習の開発	18
4.2	教材等の開発	20
第5章	結果分析	22
5.1	教材のアクセスログ解析	22
5.2	受講生への事後アンケート	22
5.3	教員へのインタビュー	23
5.4	学生アシスタントへの事後アンケートとインタビュー	23
5.5	課題提出内容の比較分析	24
第6章	考察	28
第7章	今後の課題と展望	29

第8章 おわりに .....	30
参考文献 .....	31
謝辞 .....	32
付録 .....	33

## 第1章 はじめに

### 1.1 研究の背景

情報リテラシーとは、自律した生涯学習者であるために、情報を探し出し、評価し、効果的に活用し、情報の様々な形態を活用できる能力である（「学び」の認知科学事典, 2010）。また、国立大学図書館協会学習支援検討特別委員会が 2015 年に『高等教育のための情報リテラシー基準』において、高等教育の学びの場において必要と考えられる能力」、すなわち課題を認識し、その解決のために必要な情報を探索し、入手し、得られた情報を分析・評価、整理・管理し、批判的に検討し、自らの知識を再構造化し発信する能力と定義している。

近年、情報リテラシー能力の必要性は社会的にも認められており、大学図書館においても「情報リテラシー教育」の一環として、主に情報検索についての講習を行っている。

しかし、担当者や会場、実施時期、回数や講習形態などの制約から、必ずしも教育効果を上げているとはいえないのが実情である。例えば、講習を実施するのは、対象授業で課題が出される前に 1 度だけというパターンが多い。つまり、その課題に取り組む際には役立つかもしれないが、期間を置いて別の課題に取り組む際に、以前に講習で学習した内容が応用できるかどうかまでは配慮できていないのが現状である。

加えて、最近では大学の授業の実施方法にもアクティブラーニングや課題解決型学習など、旧来の一斉講義型とは違う形態のものがでてきている。例えば、筆者が勤務する大学では、初年次の演習型授業でディベートを取り入れている学部がある。その授業ではディベートを通して、「話す・読む・聞く・考える・(情報を) 探す」ことを実践的に学べるようになっている。そのため、型通りのディベートを 1～2 回行うのではなく、複数回テーマやメンバーを変えて半期の授業期間の間に繰り返し行う。つまり、その授業では全ての課題に必要な基礎スキルとして情報検索が要求されるのである。そのような場合、前述したような全 15 回の授業のうち、課題実施前に 1 回の講習を行うだけでは対応が難しい。しかし、複数回ある課題の前に毎回、講習を行うことは、授業時間、図書館職員の人数、場所、機材の問題からみて現実的ではない。

では、授業中の全ての課題に必要な基礎スキルとして情報検索が要求される授業に対して、大学図書館が対応するにはどうしたらよいだろうか。今回の研究で協力を依

頼した授業では、2014 年度に情報検索の講習を課題前の必要なタイミングで実施にしたにも関わらず、課題の合格基準である文献数が探せないことや、信頼性の高い文献を探すことをせず、検索サイト等から安易な情報入手に頼る傾向にあることが課題であった。それを改善するためには、これまでの対面講習で教えていた内容を、それ以外の教授方法も活用して対象授業の必要なタイミングで提供すること、必要な場面では信頼性の高い文献を探すことへの動機づけを高める工夫を実施することに可能性があるのではないだろうか。そのような問題意識から、インストラクショナル・デザインの理論を活用することに着目した。

## 1.2 研究目的

本研究の目的は、大学図書館が行っている情報検索の講習をのうち、授業中の全ての課題に必要な基礎スキルとして情報検索が要求される授業に対して、より授業の形態や文脈に合わせた形で情報や支援の提供を試みることで学習効果を上げることにある。そのテーマについて、先行研究を調査したところ、従来の講習形態の改善策として教授方法に e ラーニングやインストラクショナル・デザインの理論を用いた事例や授業と連携して、講習とは違う方法で図書館が授業の課題に必要な情報提供を行った事例は存在したが、まだ数が少ないのが現状であった。そのため、その応用と実践の可能性を探るために、学部教員と連携をし、情報検索の講習の部分だけでなく授業全体と学習目標等を含めた分析を共同で行い、必要なタイミングで情報検索について学習するために必要な講習・教材等を設計・開発をして提供することと、信頼性の高い文献を選ぶようになるために、情報検索への動機づけと事後フォロー等の仕掛けを用意することにより、学習効果を上げることを目指す。

## 1.3 先行研究

国内の大学図書館が関係して実施した情報リテラシーに関する講習の実践例について調査を行った。実施形態としては、情報教育科目や情報リテラシー能力育成のための科目と連携をして、例えば全 15 回のうち、1 回を図書館が担当をして情報検索の講習を実施する例が多い。その内、e ラーニングや LMS を活用した事例としては、大阪女学院大学 (小松 2007)、三重大学 (杉田ほか 2007)、広島大学 (庄ほか 2009a, 2009b) などがあり、そのうち評価考察まで行われている広島大学 (庄ほか 2009a)

の例を紹介する。あわせて、インストラクショナル・デザイン理論の活用及び授業の文脈にあわせて図書館が講習等を提供した例としては九州大学(野原ほか 2014, 兵藤ほか 2015)があり、その中で、授業の課題に合わせて連携をした九州大学(野原ほか 2014)の例を具体的に紹介する。

#### (1) 先行研究(庄・塚本 2009a)の手法

初年次の情報教育の科目と連携して全15回のうち1回を図書館が担当する情報リテラシーの講義において、eラーニングおよびLMSを活用した事例である。

結果として、技術的スキルは向上したが、情報の評価と利用に関する判断力の向上はあまり変化が見受けられなかった。原因として、初年度前期という短期間での学習であることが挙げられている。しかし、それだけではなく講習直後に学習したことを応用する機会(課題)がなかったことも原因に挙げられる可能性がある。

#### (2) 先行研究(野原ほか 2014)の手法

初年次向けの自由選択科目授業において、授業(教員)と協働し、課題にあわせた文献紹介や情報検索方法について紹介するパスファインダーを作成し、必要な時に受講生が参照できるようにインターネット上で提供した事例である。

パスファインダーとは、特定のトピックや主題に関する資料や情報を収集する際に、図書館が提供できる関連資料の探索法を一覧できるリーフレットのこと(図書館用語辞典編集委員会、2004)である。近年では、インターネット環境が整備されてきたこともあり、Web上で提供されることも多くなっている。

結果として、提供したコンテンツについて、受講生から該当授業の課題を進める上で役立つという評価が得られた。授業内の課題で情報検索が必要であり、受講生が必要なタイミングで授業の文脈に合わせて図書館が情報提供を行って成果を出した例としては現在のところ、国内で報告されている唯一の試みである。ただし、パスファインダーを作成および提供するために使用したツールは一般的ではなく、他機関では応用しにくい。

### 1.4 本論文の構成

本論文は7つの章からなる。本章以降の各章における概要を以下に示す。

第 2 章では、該当授業の計画、前提条件や学習目標について分析し、2014 年度の実施内容を整理した。それらを含め、2014 年度の課題に対してどのように改善するかを検討した結果を述べる。

第 3 章では、2 章で行った分析と改善点の整理した結果をもとに該当授業に対する講習や教材の設計をどう行ったかについて述べる。

第 4 章では、3 章で設計した講習や教材の開発をどう行ったかについて述べる。

第 5 章では、受講生の提出した課題の内容分析、Moodle で提供した教材のログ解析および、受講生や教員、学生アシスタントのアンケート結果やインタビューの手順と結果を述べる。

第 6 章では、5 章で得られた分析結果をふまえて、学習目標に対して提出された課題の内容が合格基準に達していたか、つまり学習効果が上がったといえるかについて考察する。また、Moodle のログデータやアンケートやインタビューの結果から、授業実践全体の効果検証と今後の改善案について考察を行う。

第 7 章では、本論文のまとめを行うとともに、今後の実践に向けた課題と展望を述べる。

## 第2章 事前分析

まず、協力していただく対象授業についての前提条件である、授業計画と学習目標、その中で予定されている情報検索が必要な提出課題の内容と合格基準、授業に関わる人物と役割について確認を行った。そして、次に対象者（学生）、技術、情報検索部分の課題、学習環境の分析とあわせて 2014 年度と同授業において実施した情報検索講習における改善点の分析を行った。

なお、分析に当たっては教員と図書館職員が共同作業で行った。また、必要に応じて受講生にアンケートを取り、受講生の先輩である学生アシスタントにもヒアリングを実施した。

### 2.1 前提条件

協力をしていただく対象授業について、前提条件を教員にヒアリングを行い整理した。

まず、対象クラスは A 大学法学部の 1 年生 2 クラス（52 名）である。2 クラスは別曜日に開講されており、両クラスとも同じ教員が担当している。対象授業は初年次向けの演習型授業である。必修科目であり、クラス分けは在学番号で強制振り分けされている。また、この科目では、あるテーマを自分の問題として取り組む姿勢を身につけるために、学部全体の方針として「ディベート」が取り入れられている。そして、対象クラスでは、同じ学部の上級生である学生アシスタント（以下、SA とする）が 4 名ずつ授業中に教員の補助として、授業内の担当グループをサポートする。また、授業時間外の課題については、図書館で雇用する SA（以下、LSA）がサポートすることになっている。対象授業にかかわる関係者の詳しい役割については表 1 にまとめた。なお、SA は全て協力教員の現役ゼミ生であり、教員との信頼関係ができている。LSA は図書館が雇用するため、図書館職員が指示を行う。そして、対面講習の部分については、教員、SA、図書館職員が特に協働して準備から実施まで取り組む。授業時間外のフォローについては、図書館職員と LSA が主に担当する。

次に、授業全体の学習目標は、①立論スキル、②情報収集スキル、の基礎力を身につけることである。具体的には、①は表現力（説明する力・対話する力）を身につける必要性を理解し、習得すること、②は Yahoo や Google に頼った情報収集の危険性を理解し、幅広く正確な知識を得ることができるようになることである。また、特に

今回の研究で対象となる②に関する課題の合格基準については、「信頼性の高い根拠資料を探せるようになる。ただし、資料を正確に調べられる能力（読み取る力）までは達しなくてよい」、とした。あわせて文献数は10件以上とした。

表1：授業関係者の役割

名 称	役 割
教員	授業のマネージャーとタイムキーパー、コメンテーター。 毎回の授業運営役はSA（事前に教員から指示あり）。
SA	授業時間中の学生アシスタント。授業の運営役、コーディネーター、サポーター。1クラス4名いて、各担当グループ（5～6人）あり。雇用は学部単位(担当部署：教務課)。
図書館職員 (LS)	コーディネーター兼インストラクター。対面講習の情報探索部分のインストラクターを担当。LSAの研修とサポートも行う。
LSA	授業時間外の学生アシスタント。学習サポーターとして図書館で勤務。今回のクラスの事前課題のチェックとアドバイスを担当。雇用は授業単位(担当部署：図書館)。

## 2.2 授業計画と実践内容

対象授業の全体計画と図書館が関わるポイントおよび、関係者（図書館職員：LS、学生アシスタント[授業中]：SA、学生アシスタント[授業時間外]：LSA とする）を図1に整理した。

全15回のうち第6～13回において、グループ対抗のディベートを3回実施する。各ディベートの試合前日までに、受講生には試合の中で参考にする文献リストを提出する課題（情報検索が必要）が出される。その課題が合格基準（2.1. 前提条件を参照）を満たしているか否かの確認と、不足している場合のアドバイスはLSAが行う。また、第14回では学部内の合同ディベート大会（クラス対抗戦）が開催される。その際は前3回のように事前課題は出されないが、その準備としても情報検索が必要である。

以上のように、対象授業では第4回の情報検索の講習後にも、課題提出（3回）、ディベート大会の準備（1回）の合計4回、繰り返し情報検索の講習で学習したことの応用と結果に対してのフィードバックが授業時間内外で実施される構造になっている。

回	内 容	
1	ガイダンス、説明・対話力UP講座①	
2	説明・対話力UP講座②	
3	説明・対話力UP講座③、ディベート入門	
4	図書館利用説明会(対面講習)	対面講習とeラーニング教材の紹介LS・SA
5	ディベート合同説明会(全クラス合同)	
6	第1ディベート:リハーサル	課題提出① LSA
7	第1ディベート:試合	
8	第2ディベート:リハーサル①	
9	第2ディベート:リハーサル②	課題提出② LSA
10	第2ディベート:試合1日目	
11	第2ディベート:試合2日目、大会出場者の投票	
12	第3ディベート:資料集めと戦略会議	課題提出③ LSA
13	第3ディベート:試合	
14	合同ディベート大会(クラス対抗)	
15	授業のまとめ、振り返りスピーチ	

図1：授業計画全体と図書館が関わるポイント

なお、ディベートのテーマは毎回変わるように計画されている。テーマの選定方法はまず教員とSAにより各回候補を2つ挙げ、その中から受講生に多数決で選んでもらうようにしている。テーマは法学部の1年生が興味を持ちそうな時事的なもの、法律に関連するものが中心になっており、回を重ねるごとに難易度が上がるように工夫している。2014年度と2015年度のディベートのテーマは次のとおりである。

【2014年度】

- ・第1回：インターネット掲示板を通じたベビーシッター募集を禁止すべきである

- ・第2回：日本は外国人労働者受け入れを拡大すべきである
- ・第3回：日本は上場会社に1名以上の女性取締役を任用させるべきである

**【2015年度】**

- ・第1回：少年犯罪に関する実名報道を禁止すべきである
- ・第2・3回：日本でクォータ制を導入すべきである
- ・第4回：自転車の運転を免許制にすべきである

(金曜クラス)

- ・第1回：早期英語教育を導入すべきである
- ・第2・3回：高齢者の医療費自己負担割合を3割まで引き上げるべきである
- ・第4回：自転車の運転を免許制にすべきである

### 2.3 対象者(学生)分析

対象となる学生（対象授業の受講生）の特性と学習内容に対する態度について、教員およびSAにヒアリングを行い、表2に整理した。

表2：対象者(学生)分析

種別	項目	詳細内容
一般情報	対象者人数	52人(A 大学法学部、1年生他[*]) *内若干名は再履修者
	年齢層、男女比	18～20歳、男女比(男24人、女28人)
特性	知的能力	高校卒業程度
	経験的背景	入学前にディベートの経験なし
	態度	モチベーションが高くない傾向にある。(理由：クラス選択が在学番号により強制振り分けされたものであり、自分が選んだものではないため。)
	配慮の必要性	ディベートはクラス内のグループ単位で活動を行うため、チーム作業も可能であれば講習の際に取り入れる。
学習内容に対する態度	レベル(知識・技能)	ディベートの経験なし。 大学図書館で提供しているようなデータベースの利用経験なし。一般的なインターネット検索は普段の生活で利用している。
	態度	[教授内容に対する受講者の態度] 学習には前向き(単位と関連があるため)。情報検索というとインターネットの検索サイトをまず利用する。その際に情報の信頼性を意識して選んでいるかは不明。 [受講者が好む教授形式やメディア] グループワーク、PCよりもスマートフォンを利用する方が慣れている。キーボード入力が苦手な学生も一部いる。
	言語	[受講者の言語レベル] ディベートや情報検索の専門用語は知らない。

※「表3.1 対象者分析表」(「3.2 対象者分析」所収 [内田ほか, 2005] p.46-47)をもとに著者が一部改変して作成した。

## 2.4 技術分析

「(学生が) 学習に利用できる技術」「教育開発に利用できる技術」を、普段の学生生活や大学内の環境を検討した結果、学生、教員が普段から使用している LMS の Moodle (Version 2.8.3) を利用することにした。該当授業は Moodle 上にすでにコースがあり、学生への連絡や資料の配信に利用されているため、教員、学生とも利用に抵抗がなく慣れていることが理由である。

## 2.5 環境分析

受講生の学習時の環境について、教員と SA (1 年次に同授業の履修経験がある) へのヒアリングおよび受講生への事前アンケートを実施し分析した。その際、特に、授業時間外にインターネットを利用できる環境があるかについて調査した。その結果、対象者全員が自宅にインターネットが使える PC があり、また、スマートフォンも所有していることが判明した。あわせて、受講生の対象授業へのモチベーションが高くないため、授業時間外での個別学習を強制すると、受講生がさらに負担感を感じて更なるモチベーション低下につながる可能性がある。したがって、授業時間外の個別学習はなるべく強制させない方がよいという意見が教員から出された。

## 2.6 情報検索部分の課題分析

課題分析図を作成した(付録 1 参照)

課題の分類としては主に「知的技能」、探した文献の中から必要なものを選ぶ際に、信頼性の高い文献を選択するようになることは「態度」とした。

信頼性の高い文献を選択することは、「知的技能」とも言えるが、本研究では 2014 年度の同授業において、知識や能力があるにも関わらず、労力をかけずに安易に検索サイト等から得られた情報を使用する受講生がいることが課題となっており、「継続的に信頼性の高い文献を選択するようになる」という行動変容を含めたものが教員および図書館職員の望む学習目標であったため、ここでは「態度」としている。

## 2.7 2014 年度の実施状況分析と課題

2014 年度の同授業での情報検索講習の実施内容と結果から見える課題の分析を行った。

## (1) 実施状況分析

情報検索講習と事後フォローの実施内容について分析を行ったところ、次の3点が明らかになった。

第1に、授業計画(全体)は今回(2015年度)と同じであり、図書館利用説明会(対面講習)の実施時期も同じくディベート実施前の適切なタイミングであった。

第2に、今回と同じくSAによる授業時間中のフォロー、LSAによる授業時間外の課題のフォローも実施された。

第3に、図書館利用説明会(対面講習)を1回(90分)実施した。講習内容は表3に記載した。説明時の資料は紙媒体を配布し、データファイルでの提供はしなかった。講習時の全ての説明は図書館職員が実施し、項目の1、7、8はスライドを見せながら口頭で説明。2～7は各検索ツールの説明後にその場で練習問題を受講生に解いてもらい答え合わせを行った。

2015年度は、対面講習の実施とSAおよびLSAによるフォロー体制を置くことはずでに決定している。そのため、改善をするのであれば、対面講習と教材や提供資料(情報)の内容、フォロー体制に着目する必要があると推察される。

表3：2014年度の講習内容

1	大学図書館の役割と機能
2	OPACの使い方と練習問題
3	辞書のデータベースの使い方と練習問題
4	新聞記事のデータベースの使い方と練習問題
5	政府資料の検索方法と練習問題
6	雑誌記事のデータベースの使い方と練習問題
7	閉架資料の利用方法
8	文献の出典情報の書き方

## (2) 課題分析

実施結果として、提出された課題が合格基準に達していたかをまず検証し、結果を下記の表4にまとめた。

### ①評価基準

- ・ 10 件以上あるか
- ・ 各文献が客観性の高い出版物等に掲載されたものであるか
- ・ 上記の文献が提出文献の何割あるか

### ②分析表

<表の見方>			
・ 網かけのセル：10 件以下のもの			
・ 数字のよみとり方：（例）信頼性の高い文献数/全体の文献数			
・ 下線の意味：信頼性の低い文献または文献以外のものが含まれていた			

表 4：提出課題の分析結果(2014 年度)

#### 【2014 年度】

グループ	1 回目	2 回目	3 回目
A	<u>6/11</u>	<u>9/13</u>	5/5
B	6/9	<u>11/15</u>	未提出
C	7/7	<u>8/10</u>	<u>8/10</u>
D	4/4	<u>9/10</u>	10/10

※2014 年度は 3 回のみ実施、4 回目はなし。

信頼性の低い文献または文献以外のものとして提出された課題に含まれていたのは、例えば次のようなものである。

- ・ 著者の素性や執筆目的がわからない個人または団体のブログ掲載の記事
- ・ ネットニュースに掲載されたエンターテインメント系週刊誌の記事
- ・ 作成者（執筆者）が不明のインターネットの Web サイト
- ・ 文献以外のもの：法令の条文、企業のホームページ

匿名性が高く、意見に対して根拠情報が明示されていないものは、信頼性が高いとはいえない。また、法令の条文、企業のホームページ等は参考資料ではあるが、文献ではない。

また、教員にインタビューをしたところ、課題として出されたのは次の 4 点である。

①文献を多数探すことができない（合格基準の 10 件を下回っている）、②議論は印象

論で勝負している（主張に対しての論拠が明確でない）、③信頼性の高い情報の検索方法を学習したはずなのに、安易な情報検索に頼りがちである、④相手の意見に反論する際に、その反論の論拠が示せない。特に課題③については、例えば新聞記事のデータベースの利用方法を知っているにも関わらず、Yahoo ニュースなどのニュースサイトから見つけたものを孫引きの状態ですべて提示（原典を確認していない）するということが行われていたということであった。

分析表と教員のインタビューの結果から、受講生の中には情報検索についての知識は学習したにも関わらず、信頼性の高い文献を選ぶという行動にはつながっていないケースがあることが明らかになった。また、1 回目の課題提出の文献数が合格基準に達しているのが 1 グループのみという結果から、情報検索に対する動機づけが低いことも推察される。

## 2.8 事前分析の考察

2.1～7 節で実施した事前分析の結果から、2014 年度の課題として、情報検索についての知識は学習したにも関わらず、信頼性の高い文献を選ぶという行動につながっていないケースがあること、情報検索に対する動機づけが低いことが推察された。また、前提条件として対面講習の実施、SA および LSA による事後フォローの体制は決定しているため、それ以外の部分である対面講習の内容と教材や提供資料（情報）の内容、事後フォロー体制の内容について改善を検討する必要があることが明らかになった。以上のことを踏まえ、設計・開発の際に注意する要点としては次の 2 点が考えられる。

### (1) 授業時間外の課題設定について

「2.3. 対象者（学生）分析」「2.5. 環境分析」の結果から、受講生の授業に対してのモチベーションが高くないことが示唆された。そのため、反転学習や e ラーニングによる授業時間外の独習を課題として設定することはできない。したがって、対面講習の時間内で「情報検索に対する動機づけ」「情報検索の方法の説明と練習」の部分をいかに改善するか、情報検索に役立つ情報提供をどう提供するかが、学習効果を上げる鍵になる可能性が高いであろう。

### (2) 対面講習の回の改善点について

実施時期と授業関係者等の役割は 2014 年度と変更がないことが明らかになった。そのため、対面講習の回での講習内容と教材部分等の部分で改善が必要であると推察

される。例えば、教材の提供方法を印刷資料の配布のみとしていたが、「2.4. 技術分析」で採用することにした Moodle 上の対象授業のコースに掲載することも検討する。あわせて、文献の種類ごとに検索ツールを選び変える必要があるため、その選択もしやすいように環境を用意することも検討する。

### 第3章 対面講習および教材等の設計

事前分析結果をもとに、対面講習と教材の設計を行った。

#### 3.1 対面講習の設計

対面講習の回の学習目標は「ディベートに必要な信頼性の高い文献を探ることができる」、「マニュアルを見ながら検索ツールを使って文献を探ることができる」の2点である。

事前分析の結果から、今回は、授業時間外には用意されている課題に取り組む以外の個別学習は用意せず、対面講習の回とその後の情報提供やフォローの部分での改善を実施することにした。

まず検討したのは、「情報検索への動機づけを高める（＝ディベートに必要な信頼性の高い文献を探す）」と「情報検索方法の説明（＝マニュアルを見ながら検索ツールを使って文献を探す）」の部分である。それぞれに改善した点について述べる。

##### (1) 「情報検索への動機づけを高める」ための方略

動機づけを高めるための方略を検討するため、「学習意欲を検討するための授業づくり点検表」（稲垣・鈴木，2015）を用いて、2015年度の対面講習の前提条件等を学習意欲の観点から点検した。

表の1行目（学習者の特徴）には、学習者の学習意欲に関する特徴をARCSの観点から記入している。2行目（学習課題）には、対面講習の学習課題がいかに学習者をひきつけるかを記入している。3行目（指導方法）と4行目（教材の特徴）は指導方法と学習環境（教材等）について期待できる学習者の態度を記入している。あわせて、記入した内容が授業にとってプラス（+）であるかマイナス（-）であるかを付記している。記入できない部分については空欄にしている。

表5：学習意欲を検討するための授業づくり点検表

テーマ「ディベートに必要な信頼性の高い文献の検索」				
設計要因	ARCS カテゴリー			
	注意	関連性	自信	満足感
学習者の特徴	・必修科目であり、関心はあるが意欲が低い(-)	・必修科目であり、関心はあるが意欲が低い(-)	・ディベートもそのための情報検索も経験がない(-)	・クラスが強制振り分けのため、関心が低い(-)
学習課題	・新しい(+)	・授業の準備と課題に必要である(+)	・難しく見える(-) ・初めて体験する(-)	・獲得される知識の高い応用性(+)
指導方法	・検索ツールを実際に使って検索する活動は目新しく興味を引く(+)		・検索ツールの利用(+)	・必要な情報を自分で探せる経験(+)
教材の特徴	・事後課題に役立つ情報が集約されている(+)			
概要	・現状を維持する	・マイナスの対応に限界があるので、プラスの部分強調する	・自信をつけさせる必要がある	・現状を維持する
動機づけ方策		・授業の内容と事後課題に直結していることを強調する	・事後課題等はどう応用したらよいかをイメージできるようにする。 ・SAによるロールモデルの提示 ・事後フィードバックの強化	

表5に示した点検の結果、注意と満足感は現状維持、関連性は授業の課題との関連性をより強調することとした。一方で、もっとも問題となる自信については、ディベートもその準備のための情報検索も初心者には難しく見えるため、その点に特に配慮することにした。具体的には次の3点、①学習した知識を事後課題等にいかに応用したらよいかをイメージできるように提示する、②彼らの先輩であるSAにロー

ルモデルとしてお手本を実際に提示してもらうこと、③受講生が個人またはグループで練習問題や事後課題に取り組む際には SA や LSA および図書館職員により、2014 年度よりフィードバックの内容を強化するよう工夫すること、で対応することにした。

## (2) 情報検索方法の説明

「2.7 情報検索部分の課題分析」に基づき、内容構成を検討した。

まず、文献検索に入る前に「信頼性が高い文献」の特徴について、具体例を用いて例示しながら説明を行うこととした。あわせて、信頼性が高い文献が検索できる各ツールの内容と利用方法（特にキーワードの設定方法）を紹介する。その後、利用を推奨する検索ツールの紹介と利用方法の説明を行い、練習と理解度の確認も兼ねて課題となっているディベートのテーマについて、グループごとに先に紹介した検索ツールを使って、文献を探すグループワークを行うこととした。調べた結果については、Moodle コース上に用意した投稿用のフォーラムに投稿してもらい、その場かもしくは後日、図書館職員が確認とフィードバックを行うこととした。

## 3.2 教材等の設計

Moodle の該当授業のコースに対面講習に使用するスライド（PPT および PDF ファイル）と課題に必要な検索ツールのリンクとマニュアル等を掲載するトピックを 1 つ使用させてもらい、設置することとした。該当授業の Moodle コースは教員から学生への連絡や、レジュメの配布、アンケート等でも日常的に使用されており、学生、教員とも利用に抵抗がないことがその理由である。

中でも検索ツールのリンクとマニュアルについては、種類が多い上に、既存の図書館のホームページ上にあるリンク集から探すと、他の使わないデータベースも多数表示される中から探す必要がある。そのため、受講生が課題に取り組む際のモチベーションと自信の低さを支援する意味で、利用しやすいように必要な検索ツールのみを一覧化して提示することとした。

## 第4章 対面講習および教材等の開発

### 4.1 対面講習の開発

「3.1.(1) 情報検索の動機づけ」で検討した結果、今回の対面講習では受講生の自信の低さについて、①事後課題への応用方法のイメージの提示、②先輩である SA によるロールモデルの提示、③事後フィードバックの強化、により対応することとした。

まず、①については情報検索と最後のまとめ部分の説明において強調し、次に②については、SA および教員と検討した結果、SA により模範的なディベート（信頼性の高い文献を引用したもの）を実演することにした。また、その直前には受講生同士でもミニ・ディベートをしてもらい、両方を比較させることにより、「信頼性の高い情報の必要性」に気づかせることとした。SA による模範的なディベートについては SA と図書館職員で台本を作成し、練習を行って内容を改善しながら準備をすすめた。さらに、③については、授業中の練習問題を行う際は、SA と図書館職員がフィードバックを行うこととした。課題提出の際には授業時間外に LSA による合格基準に達しているかどうかのチェックとフィードバックを受けないと提出ができないという条件は昨年と同じである。当日の指導過程は表 6（カッコ内の数字はガニエの 9 教授事象の数字）のとおりである。

なお、実施場所は該当授業が毎週行われる教室（可動式の椅子と机のあるゼミ用教室）で実施することにし、検索ツールの使い方を学習してもらうために、ノート PC を 1 人 1 台利用できるように学内の貸出用ノート PC の配達サービスを利用して準備することにした。

表 6 : 対面講習の指導過程

時配	学習内容と活動(*)	指導上の留意点・評価
5分	1. ディベートの準備に必要なことについて尋ねる(3) 2. 学習課題の提示(2) 「ディベートに必要な情報検索方法について理解しよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講習内容について注意を向けさせる</li> <li>・自分に関連することだと強調する</li> </ul>
10分	3. 作戦会議の後、グループ単位でミニ・ディベートの実施(3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受講生に自分達のディベートについての現在のレベルを確認させる。発話することでアイスブレイクも兼ねる。</li> </ul>
10分	4. SA による模擬ディベート(4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・信頼性の高い情報を根拠として示すことで説得力が増すことを気づかせる。</li> <li>・受講生のロールモデルである SA がお手本を示すことで、学生でも実施可能だというイメージを持たせる。</li> </ul>
10分	5. ミニ・ディベートの振り返り(5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両ディベート例を比較することで情報検索と信頼性の高い資料の必要性を気づかせる。</li> <li>・各グループには担当 SA が振り返り作業に参加し、上記の点を強調する。</li> </ul>
30分	6. リサーチ(情報検索)の方法の説明(4,5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・信頼性の高い資料の特徴、情報検索のコツとおすすめの検索ツールと利用方法について、図書館職員が説明する。</li> </ul>
20分	7. グループで情報検索の練習(6,7) 8. 調べた文献情報を Moodle コース上の指定された箇所に投稿(6,7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ単位で、6で説明した方法を用いて情報検索を行わせる。</li> <li>・引用ルールに基づいた文献情報の記載方法についても練習をさせる。</li> <li>・各グループの受講生のフィードバックは SA と図書館職員が担当する。</li> </ul>
10分	まとめ：ディベートを楽しむためのポイント(8,9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員より今日の学習成果について講評をしてもらい、SA と図書館職員からディベートの準備に必要な作業手順とモチベーションの持ち方について、再度要点の説明をする。</li> </ul>
後日	8で投稿された内容について、図書館職員が個別にフィードバックをする(7,8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Moodle 上でもコメントを返し、教員や SA にも結果を伝えて、次回の授業で必要であれば個別フォローを依頼する。</li> </ul>

## 4.2 教材等の開発

該当授業の Moodle コース上の 1 トピックを使って、対面講習で使用するスライド資料、検索ツールとマニュアルは別ページ（「おすすめリソースマップ」）にまとめて掲載した（図 2-1）。グループワーク用のフォーラムも同トピック内に設置した。



図 2-1：トピックの構成

検索ツールとマニュアル等をまとめたページ「おすすめリソースマップ」の構成は図 2-2 のとおりである。

ページ上部に調べたい文献の種類ごとにおすすめの検索ツールのリンクを一覧表にまとめた。また、その下には特に大学が契約していて利用できる有料ツールについて内容紹介とマニュアルにアクセスしやすいように同じく一覧表にまとめて授業の準備および事後課題に取り組む際に利用しやすいようにした。

ツールの種類	無料	有料
辞書・事典	コトバンク、Yahoo!辞書	JapanKnowledge
新聞	朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞、西日本新聞	朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞、西日本新聞
雑誌	CiNii Article(本文なし)	CiNii Article(本文あり)
本	WebcatPlus 新書マップ 西南学院大学図書館OPAC	
政府資料	e-Gov	
政府統計	e-Stat	
法令	法令データ提供システム	

※リンクからつながらない場合は、[図書館HPのデータベースのページ](#)からアクセスしてください。  
画面の中部にある「学部学科のお勧めから探す」のところで自分の学科を選んで、右下の「表示」ボタンをクリックしてください。

【有料ツールの説明】

分野	データベース名	内容	マニュアル
用語	JapanKnowledge	約50種類の有料の辞書・事典等が一括検索できる (→さらに詳しく)	有
新聞記事(全国)	朝日新聞(聞蔵II)	1985年以降の朝日新聞と週刊朝日、AERAの記事、縮刷版(1945-1989)、知恵蔵など (→さらに詳しく)	有
新聞記事(全国)	毎日新聞(毎日Newsバック)	1987年以降の毎日新聞、過去紙面(1872-1959年)、週刊エコノミストなど (→さらに詳しく)	無
新聞記事(全国)	読売新聞(ヨミダス歴史館)	1986年以降の読売新聞、過去紙面(1878~1989年)、現代人名録など (→さらに詳しく)	有
新聞記事(全国)	日本経済新聞(日経テレコン21)	日本経済新聞(1981年10月以降)、日経産業新聞(1981年10月以降)、日経MJ(1985年10月)、日経ヴェリタス、日経金融新聞(1990年4月~2008年1月)など (→さらに詳しく)	有
新聞記事(九州)	西日本新聞(Papyrus)	1989年以降の西日本新聞 (→さらに詳しく)	有
雑誌論文	CiNii Articles	国内の約1700万件の学術論文等 (→さらに詳しく)	有
図書(新書)	新書マップ	国内で発行されたノンフィクション・教養系の新書、約17,000冊 (→さらに詳しく)	有
図書	WebcatPlus	全国の大学図書館や国立国会図書館等が所蔵している本や雑誌など (→さらに詳しく)	有
政府情報	e-Gov	各省庁の白書、報告書、パブリックコメントや行政文書など (→さらに詳しく)	無
政府統計	e-Stat	政府が発表した統計全般 (→さらに詳しく)	有
法令	法令データ提供システム	日本の現行法令 (→さらに詳しく)	無

【自宅から有料のツールを使う方法】  
・自宅のパソコンにVPN接続の設定をすると有料のツールを使うことができます。  
【設定方法】[SAINSポータル](#)>SAINS関連情報：SAINS情報>利用できるサービス：VPN接続

【有料ツールを使う時の注意点】  
・利用後は必ず、「**ログアウト**」ボタンをクリックして終了してください。  
(×ボタンで画面を消す前に必ずしてください。次に使いたい人が使えなくなります。)

図 2-2 : おすすめリソースマップの構成

## 第5章 結果分析

結果分析として、次の5つ ①教材のアクセスログ解析、②受講生への事後アンケート、③教員へのインタビュー、④学生アシスタントへの事後アンケートとインタビュー、⑤課題提出内容の比較分析を実施した。

それぞれの評価方法で明らかにしようとしたのは次の点である。①提供した教材等が、授業でのディベート実施および課題に対して、必要なタイミングで受講生に利用されたかどうか、②実施した対面講習、提供した教材に対しての利用の有無、および利用場所や機器の確認のため、③2014年度と比較して、今回の実施結果に対しての教員の印象と受講生の変化について、④学生アシスタントのうち特にSAについて、2015年度の実施内容を改善したことにより、受講生から情報検索についての質問や相談がどの程度発生したかについて、⑤2014年度に対して、2015年度の提出課題が合格基準を満たせていたか。

詳細については、以下に述べる。

### 5.1 教材のアクセスログ解析

提供した教材等が、授業でのディベート実施および課題に対して、必要なタイミングで受講生に利用されたかどうか、Moodle上で提供した教材へのアクセスログ解析をして分析した、その結果、全体として受講生の52人中36人(約69%)が授業期間中に利用したことが明らかになった。また、利用頻度としては、課題提出およびディベートの試合を実施する授業回の前に利用が集中していることが明らかになった。

### 5.2 受講生への事後アンケート

受講生に対して、対面講習、提供した教材に対しての利用の有無、および利用場所や機器の確認のため全ての課題終了後に、アンケートを実施した。方法としては、授業時間と実施環境の問題から、2クラス別の方法、授業中にアンケート用紙(付録2参照)を配布・回収する方法と、同じ内容をMoodle上のアンケート機能を利用して実施する方法で行った。結果として、52人中51人(約98%)から回答が得られた。

提供した教材についての意見から好意的な意見もあったが、そうではない意見もあり、改善に役立つヒントが得られた(表7参照)。

表7：受講生からの意見の例

好意的な意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 根拠のある資料を集めることができる</li> <li>・ ネット(GoogleやYahoo!等)で検索するより信頼できる情報だから</li> </ul>
そうではない意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 使い方がわからなかった</li> <li>・ (使うのを)忘れていた</li> <li>・ ネット(GoogleやYahoo!等)を使った</li> </ul>

※記述はアンケートに記載された原文どおり。ただし、補足説明が必要な箇所については、丸カッコで囲み追記した。

また、ログデータと事後アンケートの結果が想定と違った学生（例えば、教材のアクセスログは無いにもかかわらず、アンケート結果では信頼性の高いものを探すように心がけたと回答している等）については、直接、回答した学生に追加インタビューを行った。その結果、Moodle上の教材の利用ログがない原因として、「グループで情報検索を行い、同じメンバーのPC画面を見ながら行ったので自分はMoodle上の教材にアクセスしなかった」「LSAに教えてもらった図書館ホームページからの検索ツールのアクセス方法を利用した」という事例もあることが明らかになった。

### 5.3 教員へのインタビュー

協力教員へ2014年度の実施内容と比較して、今回の実施内容と受講生の変化についてインタビューを行った。その結果をまとめると次の3点になる。①雑誌論文の引用率が上がり、論文中の統計情報等を使った議論も大幅に増えた。②情報検索の能力が上がり、参照する資料が同レベルになったため、対戦する班の主張の予測ができ、かみあった議論が見られるようになった。③「自分たちが必要性を感じて、自分たちの手で情報を集めてくる」ことへの意識が高まった。

### 5.4 学生アシスタントへの事後アンケートとインタビュー

学生アシスタントのうち、SA（授業中のサポーター役）8名に対して、フォローを担当した受講生（各5～6名）の情報検索能力についての評価（6段階）と授業中に受講生から情報検索についての質問を受けたかどうか、受けた場合はどのように対応したかについて、授業終了後にアンケートを実施した（付録3参照）。

その結果、SAがフォローを担当した受講生の情報検索能力についての評価と、教材のログ解析データおよび受講生向けの事後アンケート結果に一部相関が見られた。

また、授業中に受講生から情報検索についての質問を受けたかについては、具体的な検索方法について質問を受けることはなく、テーマに対して立論を考える時にそのため的手段としてどう文献を探すかというアドバイスを行ったという回答が多かった（付録4参照）。また、図書館職員が想定していた以上に、受講生との信頼関係が築かれており、メンターの役割も担っていたことが示唆された。

## 5.5 課題提出内容の比較分析

受講生が提出した課題について講習会後とその後3回の計4回分を比較分析し、理解度を検証した。その結果、次の2点が明らかになった。①2014年度に比べ、2015年度は文献10件以上揃えられるようになっている②質の点から見ても、2015年度の方が全体の文献数に占める信頼性の高い文献数が多い。詳しい分析結果は表8のとおり。

なお、評価基準については、受講生に対して事前に教員より説明をされていたものである。

### ①評価基準

- ・ 10 件以上あるか
- ・ 各文献が客観性の高い出版物等に掲載されたものであるか
- ・ 上記の文献が提出文献の何割あるか

### ②分析表

<表の見方>

- ・ 網かけのセル：10 件以下のもの
- ・ 数字のよみとり方：（例）信頼性の高い文献数/全体の文献数
- ・ 下線の意味：信頼性の低い文献または文献以外のものが含まれていた

表 8：提出課題の分析結果(2014, 2015 年度)

【2014 年度】

グループ	1 回目	2 回目	3 回目
A	<u>6/11</u>	<u>9/13</u>	<u>5/5</u>
B	<u>6/9</u>	<u>11/15</u>	未提出
C	<u>7/7</u>	<u>8/10</u>	<u>8/10</u>
D	<u>4/4</u>	<u>9/10</u>	10/10

※2014 年度は 3 回のみ実施、4 回目はなし。

【2015 年度】

火曜クラス

グループ	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
A	<u>9/10</u>	10/10	10/10	<u>9/10</u>
B	<u>10/13</u>	10/10	10/10	<u>9/10</u>
C	10/10	10/10	10/10	<u>7/10</u>
D	<u>10/11</u>	10/10	10/10	<u>9/10</u>

金曜クラス

グループ	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
A	10/10	<u>9/10</u>	10/10	<u>4/10</u>
B	10/10	10/10	<u>7/10</u>	<u>8/10</u>
C	15/15	10/10	10/10	<u>7/10</u>
D	10/10	10/10	10/10	10/10

2015年度の結果で4回目に信頼性の低い文献数が出てきている。教員に確認をしたところ、この原因としてはディベートのテーマ内容が受講生に対して難しかったことにあるとのことだった。また、信頼性の高い文献数が極端に低いグループ（金曜クラス、Aグループ）については、出席率や授業の成績から検証して、グループのメンバーが他のグループと違い特にモチベーションが低い学生が揃ったことが原因として推察されるとのことだった。

また、教員からは2014年度と2015年度の結果を比較して、2014年度の課題となっていた点に対しての受講生の変化について、次の表9のようなコメントも得られた。

表9：課題提出内容の比較についての教員からのコメント

2014年度の問題	2015年度の改善結果
①そもそも文献を多数探してくることができない。	①教員が指示したこともあるが、10本を揃えられるようになった。
②議論は印象論で勝負。	②印象論はほぼみられなくなった（ただし、読んできた文章そのまま引き写し、は多く見られている）。
③ニュースというと即、ヤフーニュース、MSNニュース（孫引きになっている。原典を確認していない。）。	③ニュースはすべて、新聞データベースからの引用になっている。
<p>④反駁の際、「・・・と仰いましたが、必ずしも・・・とは限りません」と逃げ、そこに「～だから」という自分の側からの論拠が入らない。</p> <p>Ex. 「免許制はコストがかかるといいましたが、これは正しいとは限りません。」で終わっている。</p>	<p>④反駁の際に、自分の側からの論拠補強が見られることが多くなった。</p> <p>Ex. （上述の例で）「なぜなら自転車免許制は自動車免許性とは異なり、学校の授業の中で講習を実施しそれに対し学校が免許を付与する、という形も可能だから、相手が言うようなコストがかかるわけはありません」</p>

※記述は教員から得られたコメントの原文どおり。ただし、補足説明が必要な箇所については、丸カッコで囲み追記した。

## 第6章 考察

第5章の結果分析により、第1に課題提出内容の分析結果と教員へのインタビュー結果から、学習目標としていた信頼性の高い根拠資料を探せるようになるという点については、2014年度に比べて効果が上がったことが確認できた。学習意欲の観点から授業分析を実施し、受講生にとって、一番の課題となる「自信」の部分について、講習内容、教材、フォロー体制の3点から対策を実施したことが効果につながったと推察される。

第2に、同じく課題提出内容の分析結果から、毎回、課題（ディベートのテーマ）が変わる状況でも、2014年度に比べて信頼性の高い文献を探して選ぶことができるようになったことが確認できた。教材のアクセスログデータの解析および事後アンケートの結果から、課題提出およびディベートの準備時期などの情報検索の必要なタイミングにおいて、Moodle コース上で提供した教材に受講生がアクセスしていたことも確認できた。

第3に、教材のアクセスログデータの解析および、事後アンケートの結果からは、学生の個々の理解度やモチベーションのばらつきが明らかになった。この点については、2016年度以降に引き続き対策を検討する必要がある。

## 第7章 今後の課題と展望

今後の課題としては、次の2点を挙げる。

### (1) 講義部分のeラーニング教材化

今回、対面講習で行った情報検索方法の講習については、図書館職員が実施した。しかし、職員の人数の制約を考えると、他の授業でも必要なタイミングで学習してもらえるように、今後、eラーニング教材化の検討が必要だと考える。学習形態としては、独習型もしくは学生アシスタントのフォローを伴うブレンド型が効果的だと推測する。ブレンド型を挙げる理由は、SAの事後アンケート結果の記述部分(付録4)を見ると、SAが各担当グループの受講生(5~6名)に対し、アドバイスだけでなくメンター的な役割も担っていることが示唆されるからである。今回のケースのように学習者に自信やモチベーションが低い場合には、独習可能な教材よりも、学習のメンター的存在とフィードバックを与える存在として学生アシスタントを活用するブレンド型が有効ではないかと考えられる。

### (2) 学生アシスタントによる、授業内外における受講生の個別フォローの強化

今回、学生アシスタントには、対面講習と教材の設計・開発のみ協力をしてもらった。しかし、課題提出内容の分析結果、教材のログ解析データの分析結果および事後アンケートの結果を見ると、受講生によってはさらに個別のフォローが必要だと推測されるケースがあった。SAの事後アンケート結果(付録4)を見ると、各担当グループの受講生に授業時間中に一番身近な存在として信頼関係を築いている。そのため、学生アシスタントから必要なタイミングで受講生に対して個別にフォローをしてもらうことで、さらに学習効果を上げることが期待できると考える。例えば、教材のアクセスログデータや提出課題の内容の分析を行い、フォローが必要な学生の情報をその都度、学生アシスタントと共有しておくことにより、受講生の個別フォローをすることが考えられる。

## 第8章 おわりに

本研究では、授業中の全ての課題に必要な基礎スキルとして情報検索が要求される授業に対して、図書館と学部教員が協働して ARCS モデル、ガニエの 9 教授事象など インストラクショナル・デザインの理論に基づき授業設計から実践までを行った。

対象授業の前提条件と 2014 年度の課題分析の結果にもとづき、対面講習と教材について改善を行った。対面講習では、受講生の情報検索についての自信の低さに対して、①講習内容を事後課題へ応用する方法について講習の中で説明を追加・強調する、②先輩である SA による模範的なディベート（信頼性の高い文献を引用したもの）を実演、③事後フィードバックの強化の 3 点から改善を試みた。教材については、授業の準備および事後課題に取り組む際に利用しやすいように、対面講習で提供したスライドと情報検索に必要な検索ツールについては、リンクと内容紹介、マニュアルを一覧表にまとめ、対象授業の Moodle コース上で提供した。

受講生から提出された課題の内容分析と教員へのインタビュー結果から、学習目標としていた信頼性の高い根拠資料を探せるようになるという点については、2014 年度に比べて効果が上がったことが確認できた。また、同じく提出課題の内容分析の結果から、毎回、ディベートのテーマが変わる状況でも、2014 年度に比べて信頼性の高い文献を探して選ぶことができるようになったことが確認できた。以上のことから、インストラクショナル・デザインに基づき、授業の文脈に合わせた授業設計・開発を行い講習や教材等を適切なタイミングで提供することは、図書館における情報リテラシー教育の実践方法として効果があると考えられる。

本研究では、対面講習の部分は図書館職員が実施した。しかし、職員の人数制限や、より多数の授業に必要なタイミングで学習の機会を提供することを検討するのであれば、教材の e ラーニング化の検討が必要である。また、理解度のばらつきが見られる点については、課題の提出内容や教材のアクセスログのデータ分析の結果から、授業中に受講生と信頼関係を築いている学生アシスタントに協力してもらうことで、より必要なタイミングでの個別のフィードバックを実施することで効果が上がることが推察される。

今回試みた図書館による情報検索の講習等の提供方法は、新しい情報リテラシー教育支援の方法であったが、有効であることが証明された。今後は、さらにこの方法もしくはそれを改善した方法を使った実践ケースが増えていくことが望まれる。

## 参考文献

- ・ R. M. ガニェ, W. W. ウェイジャー, K. C. ゴラス, J. M. ケラー 著, 鈴木克明, 岩崎信 監訳 (2007) インストラクショナルデザインの原理. 北大路書房
- ・ J.M. ケラー 著, 鈴木克明 編訳 (2010) 学習意欲をデザインする - ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン -. 北大路書房
- ・ 井田浩之 (2014) 「知識創造型」の情報リテラシー教育の構築に向けて. 情報の科学と技術, 64(1): 8-14
- ・ 稲垣忠, 鈴木克明編著 (2015) 授業設計マニュアル Ver.2. 北大路書房
- ・ 内田実ほか (2005) 実践インストラクショナルデザイン: 事例で学ぶ教育設計. 東京電機大学出版局
- ・ 小松泰信 (2007) 情報リテラシー科目のeラーニング化に伴う学習支援体制. 45(4) : 190-197
- ・ 佐伯胖 監修, 渡部慎一 編(2010) 『学び』の認知科学事典. 大修館書店
- ・ 庄ゆかり, 塚本絢子 (2009b) e-Learningを活用した図書館リテラシー教育-WebCTによる授業の実践. 電子情報通信学会技術研究報告, 109(330) : 1-6.
- ・ 杉田いづみ, 木下聡 (2007) e-learningシステム“三重大学Moodle”を活用した図書館情報リテラシー講習会. 52(3) : 246-253.
- ・ 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会 (2015) 高等教育のための情報リテラシー基準 2015年版 <http://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503b.pdf> (参照日 2016. 12. 01)
- ・ 庄ゆかり, 塚本絢子 (2009a) 図書館リテラシープログラムの構造化と e ラーニングの導入: よりよい初年次リテラシー教育のために. 平成 21 年度情報教育研究集会講演論文集, 96-99
- ・ 図書館用語辞典編集委員会 (2004) 最新 図書館用語大辞典. 柏書房
- ・ 野原ゆかり, 井川友利子, 山田政寛 (2014) パスファインダー作成ツールを活用した授業運用シラバス開発と授業支援の試行. 日本教育工学会研究報告集, 2014(1):339-344
- ・ 兵藤健志, 天野絵里子, 中園晴貴 (2012) 大学図書館活用セミナーをリデザインする -インストラクショナル・デザインを意識した図書館ガイダンスの取り組み-. 九州大学附属図書館研究開発室年報 2011/2012, 24-31

## 謝辞

本研究におきまして、多大なご指導をいただきました喜多敏博先生、合田美子先生、都竹茂樹先生に感謝申し上げます。また、研究の実践にご協力をいただきました、西南学院大学法学部の釜谷真史先生、学生アシスタント、受講生の皆様に感謝いたします。さらに、本研究に関するご助言や、様々な場面で励ましのお言葉をいただいた教授システム学専攻の諸先生方と学生の皆様に感謝いたします。

皆様のご協力なくしては、本研究を進めることができませんでした、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

付録

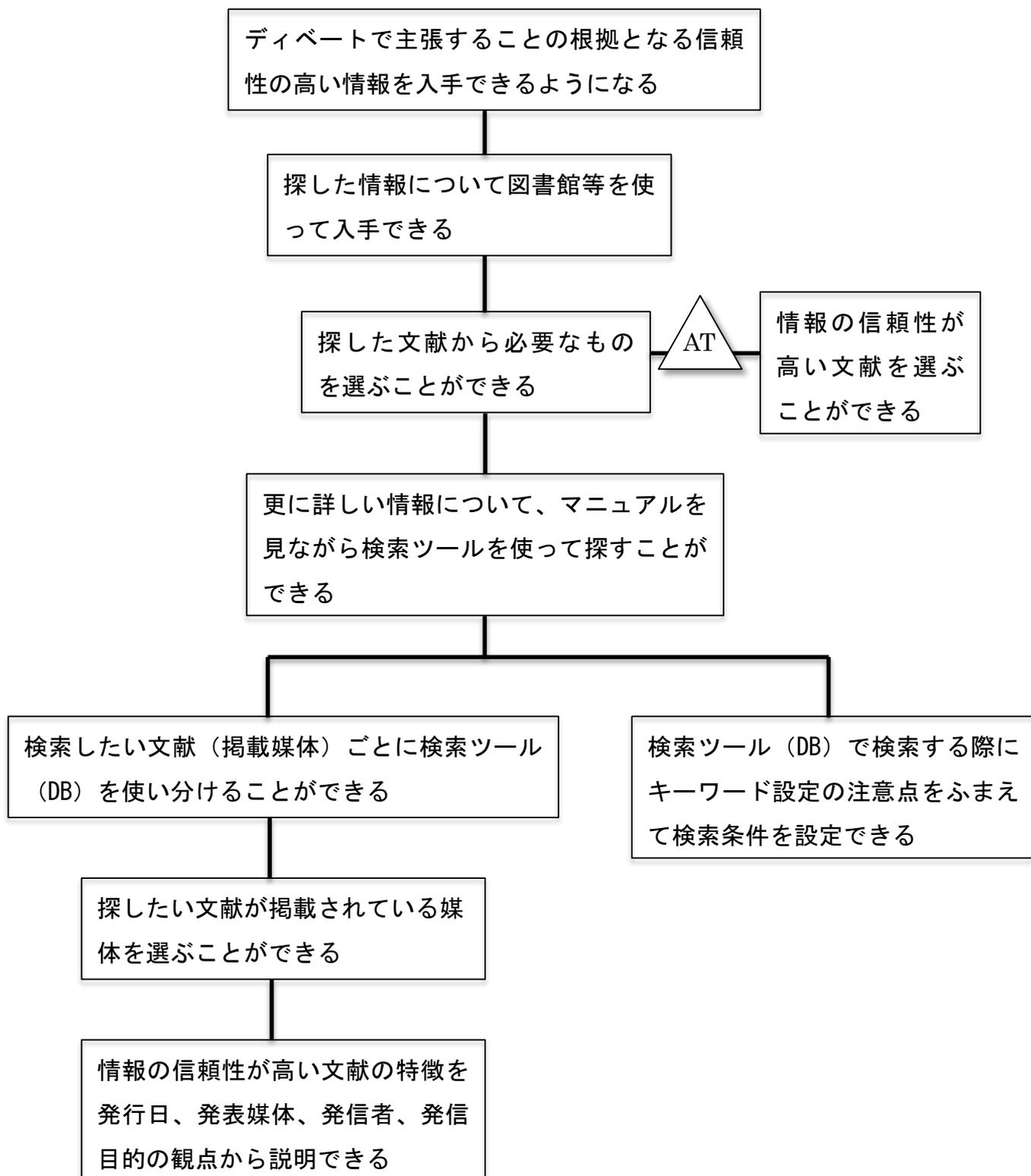
付録 1 情報検索部分の課題分析図

付録 2 事後アンケート（受講生向け）

付録 3 事後アンケート（SA 向け）

付録 4 事後アンケート結果：記述部分（SA 向け）

情報検索部分の課題分析図



AT=態度

情報検索の理解度アンケート（火曜クラス）
----------------------

今回の基礎演習で、情報検索のために図書館ツアーを行い、Moodle 上のコンテンツを用意しました。その効果がどうだったかを検証するために、アンケートにご協力ください。なお、回答いただいた内容は、修士論文の研究のために使わせていただく予定です。個人情報（外部には開示いたしません。（図書情報課 八尋英美子 [熊本大学 教授システム学専攻 博士前期課程]）

氏名： (在学番号：19AM )

1. ディベートの準備の際に、主張を裏づける情報は信頼性が高いものを探すように心がけましたか。

はい いいえ

2. 情報を探すツールとして大学(図書館)で提供している有料ツール(データベース)も必要に応じて使いましたか。

はい いいえ

3. 図書館ツアー(情報検索方法の説明) [4/28 実施] で、その後も役立ったことを教えてください。

--

4. 図書館ツアー(情報検索方法の説明) [4/28 実施] 後、ディベートの準備の際に、Moodle 上にある「リサーチ方法について(スライド)」を見ましたか。

はい いいえ

5. 質問 4 の回答理由を教えてください。

--

6. 図書館ツアー(情報検索方法の説明) [4/28 実施] 後、ディベートの準備の際に、Moodle 上にある「おすすめリソースマップ」(データベースへのリンク集)を使いましたか。

はい いいえ

7. 質問 6 の回答理由を教えてください。

--

8. 質問 4、6 のコンテンツを見た場所を教えてください(複数回答可)

大学 自宅 その他 ( ) 見ていない

9. 質問 4、6 のコンテンツを見たときに使った機器を教えてください(複数回答可)

PC タブレット スマートフォン 使っていない

## アンケート(釜谷先生クラス 基礎演習 SA)

回答者氏名： \_\_\_\_\_

【情報検索関係について（八尋からの質問）】

1)担当した学生(班のメンバー)の名前を教えてください(苗字のみで可)

2)この基礎演習では、情報検索部分の学習目標として、「**論拠のはっきりした資料を探せるようになる。ただし、資料を正確に調べられる能力(読み取る力)までは達しなくてよい**」としていました。その目標に対して、1 で答えた学生が最終的にどうだったか、下記の a~f の視点で分類し、回答欄に該当学生の名前を書いてください。（主観で構いません）

選択肢	回答欄
(a)よく達成できていた	
(b)達成できていた	
(c)どちらともいえない	
(d)あまり達成できていなかった	
(e)達成できていなかった	
(f)わからない	

3)担当していた班の学生から、資料集めの際に質問を受けましたか？ 受けた場合は、**どのような内容の質問だったか、それに対して、自分がどう回答(対応)したか**を教えてください。いくつでも結構です。

【基礎演習全体について（釜谷先生からの質問）】

4) 基礎演習 SA をやっていて困難を感じた瞬間はいつですか？ その具体的状況を教えてください。そしてその困難をどのように乗り越えたか、教えてください。いくつでも結構です。

5) 基礎演習 SA としての経験を踏まえ、来年度の釜谷クラス基礎演習 SA に伝えておきたいこと（1 年生への接し方や SA 同士・教員との連絡、その他なんでも OK)を教えてください。

以上です。

ご協力ありがとうございました！

【質問 3】担当していた班の学生から、資料集めの際に質問を受けましたか？受けた場合は、どのような内容の質問だったか、それに対して、自分がどう回答(対応)したかを教えてください。いくつでも結構です。

SA①	多くの質問が「これでいいか」という確認でした。
SA②	ディバートのモーションが発表された後に実際にどのような資料を集めたらいいかと聞かれることがあったが、例えを与えるだけで、そのあとどのように掘り下げていくかは1年生にさせて、またわからなくなったときにアドバイスをしていた。
SA③	班の子からは資料集めに関する質問よりもディバートの戦略スタイル立論の書き方等の質問を受けることが多かった。また自分たちで積極的に進めていく人がクラスの中で多かったため、質問を受けること自体比較的少なかったように感じる。振り返ると1年生とほとんど雑談していたと思う。
SA④	質問：本と論文が資料元の場合のレジュメの記載方法の違いについて。 答え：一緒にガイドブックを見ながら書きました。
SA⑤	資料の集め方について聞かれたときは新聞記事や本などの資料を探すよう伝えていました。図書館 SA をしている時に来てくれた人にはパソコンを使って新聞記事の調べ方などを教えました。
SA⑥	特に受けていません。
SA⑦	資料集めに関しては特に質問を受けていません。資料集めよりも、立論や反駁の仕方に関する質問がほとんどでした。そのような質問に対しては、立論の仕方はガイドブックを参考に、反駁については相手側の主張を前もって予測することなどをアドバイスしました。
SA⑧	・雑誌名か出版社かを区別できない CINii に表示されている情報を見て、ここが雑誌名でここが出版社だよ、と指を差して教えました。 ・Web 上の情報(著者や掲載日)が見当たらない 内閣府のホームページなどは著者が分からない場合は書かなくて良いと教えました。

【質問 4】基礎演習 SA をやっていて困難を感じた瞬間はいつですか？その具体的な状況を教えてください。そしてその困難をどのように乗り越えたか、教えてください。いくつでも結構です。

SA①	困難という言葉に当てはまるような困難には遭遇しておりません。これは、周りの SA が私より能力面で優れていたことに起因します。ですので、私は自由にやらせていただきました。感謝しております。SA の方の中には、そんな私に対する不満をお持ちの方もいらっしゃると思いますが、私の役割は、1年生に近い立場にたつということでした。その為か、愚痴を私にこぼしてくれる1年生が何人かおり、うれしくおもったこともありました。
SA②	ディバートの後の振り替えりの時にアドバイスをすることがあるが、その中でモーションの内容に触れなければいけないこと。 与党、野党両方の資料を読んで自分なりのアドバイスをしたが、その際に気を付けたのは僕たち SA が伝えることすべてが正解だとは限らないし、1年生に正解として受け取ってもらうのではなく、ひとつの案としてとらえてもらうようにした。
SA③	1年生から資料集めや立論の方向性に関して質問を受けた時。自分が思っていることを喋りすぎると、彼らのものではなく自分のものになってしまうし、また SA 抜きで1年生同士でわいわい話し合う環境が理想だと思っていたためどの程度自分が口を出しても良いのかわからなかった。実際「今喋りすぎたな」と自身ではっと気づくこともあった。資料集めが進んでいない初期の段階では静かに、集まった段階でそれをどう生かせばいいのかを一緒に考えるように心がけた。

	<p>ほとんど前期通して同じ班だったY君が印象に残った。初期は周囲に対して自分自身を表にだすことを渋っていたようにみえたが授業を重ねるにつれて徐々にそれがなくなっていく最後は立派な内容の立論を組んでいた。もともとやればできる子としても能力の高い子だと思っていたため、のびのびやっている姿をみると私も嬉しかった。</p>
SA④	<p>資料集めに関してはある程度、自分が確立しているやり方をそのまま教えることができたが、ディベートに関しては、それぞれチーム内での役割や、自分で気づかなくてはいけないこともあると思っているのでどこまで私から教えていいのかという悩みがあった。最終的には教えてあげるではなく一緒に考えるというスタンスで、その子のやり方や答えを見るける手助けをしようという風に考えて相談に乗るようにしていた。</p>
SA⑤	<p>・ディベート後の振り返りで、内容についてアドバイスを求められたとき。 自分たちで話し合いをすることで、立論を作ってほしいと考えていたので、気になったところだけ確認するように取り組みました。</p> <p>・準備の時間に話が脱線してしまうとき。 次回いつ集まって話し合うかさえ決まっていれば、その日に向けて準備するだろうと考えたので、次回集まる日だけ決めてあとは自由に話をさせました。</p>
SA⑥	<p>第1回目のディベートの際に、1年生が資料を全く持ってこなかった時はとても困りました。1年生には、テーマに対する自分の意見を立論として主張してみるようにアドバイスをしました。ですが、この経験で1年生はディベートには資料が不可欠だということを実感してくれたように思います。次の回では、手持ちの資料が全く無い、ということは無くなりました。</p>
SA⑦	<p>資料が全くなくても、原稿を用意しなくても、みんなある程度しゃべれるのでそれほど1年生が困っていなかったことです。根拠のある、相手を納得させるために資料があればもっといいディベートができるし、楽しくもなると話しましたがなかなか資料は集まらずで、口が達者な人がディベートに強いような感じになってしまっていました。しかし最後の授業の時に、みんなが資料や原稿を持っていたことは本当にうれしかったです。</p> <p>ディベートの回数を重ねていくうちに、身をもって事前学習の大事さを学んでくれたのではないかなと思います。資料や調べることの大切さに自分たちで気づけたのはとてもいいことだと思いますが、もっと早く気付いてもらうためにSAとして何かほかにできたことがあるのではないかと課題も残っています。</p>
SA⑧	<p>私自身が1年生の基礎演習が楽しかったので、資料集めやディベート等も積極的に行っていたため、消極的な学生の気持ちが分からず、どうやってやる気を出させるか悩みました。</p> <p>そのため授業を盛り上げるためにと思い自分から1年生との間に垣根を作らずにコミュニケーションがとれる雰囲気づくりは常に意識していました。</p> <p>私が1年生のときのクラスよりも、私が持っていたクラスの方が大人しかった様子を見るに、クラス内での仲の良さが大きく影響していると思います。</p>